

様式6（第15条第1項関係）

平成29年4月7日

独立行政法人
日本学術振興会理事長 殿

研究機関の設置者の所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町36番地1	
研究機関の設置者の名称	国立大学法人京都大学	
代表者の職名・氏名	学長 山極 壽一 (記名押印)	
代表研究機関名及び機関コード	京都大学	14301

平成28年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2701	補助事業の完了日	平成29年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	地域研究 (2701)
補助事業名(採択年度) グローバル化にともなうアフリカ地域研究パラダイム再編のためのネットワーク形成(平成27年度)				補助金支出額(別紙のとおり) 27,760,000円	

代表研究機関以外の協力機関

海外の連携機関

ケルン大学、ドイツ霊長類センター、エジンバラ大学、国立科学研究センター、アジス・アベバ大学、ヤウンデ第1大学、ケープタウン大学、アンタナナリヴ大学、マギル大学

1. 事業実施主体

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野
主担当研究者 イケノ ジュン 池野 旬	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	教授	アフリカ地域研究, 経済学
担当研究者 カジ シゲキ 梶 茂樹	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	特任教授	アフリカ地域研究, 言語学
キムラ ダイジ 木村 大治	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	教授	アフリカ地域研究, 生態人類学
ヤマコシ ゲン 山越 言	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	アフリカ地域研究, 霊長類学
タカダ アキラ 高田 明	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	准教授	アフリカ地域研究, 文化人類学
カネ コモリエ 金子 守恵	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	アフリカ地域研究, 生態人類学
サトウ ヒロキ 佐藤 宏樹	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	助教	アフリカ地域研究, 霊長類学
計7名				

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先(電話番号、e-mailアドレス)
ナカオヒサノ 中尾 久乃	南西地区共通事務部経理課外部資金 第一掛・主任	電話番号: 075-366-7121 e-mail: A50gaishi1@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

2. 本年度の実績概要

平成 28 年度はまず前主担当研究者の梶茂樹が平成 27 年度末に京都大学を退職したことに伴って、年度当初から池野旬が主担当研究者となった。梶は京都大学アフリカ地域研究資料センター（以下、アフリカセンター）の特任教授となるので、引き続き担当研究者として本事業の運営に参加する。また事業の進展にあわせて、これまでおもにエチオピアで研究を進めてきた京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（以下、ASAFAS）の金子守恵准教授、マダガスカルで研究を進めてきた ASAFAS の佐藤宏樹助教を担当研究者として加え、これらの地域に関する共同研究体制をさらに強化した。ケルン大学、アジス・アベバ大学、アンタナナリボ大学、ケープタウン大学には計 5 名の主担当研究者、担当研究者を派遣し、若手研究者の受入体制（宿舎、大学施設の利用、セミナー等への参加など）の調整およびこれからさらに共同研究を推進していくための折衝・調整を行った。

また国立科学研究センター、エジンバラ大学、ケルン大学からは 3 名の主要連携研究者・連携研究者を招へいし、これからこれらの連携機関と京都大学との間でさらに組織的な関わりを強化し、共同研究を推進していくための折衝・調整を行った。また招へいされた主要連携研究者・連携研究者を中心として、連携機関での国際化の取り組みやその研究内容に関する 3 回の連携国際ワークショップを開催した（昨年度に引き続き「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」と名付けたセミナーを、2017 年 1 月 13 日、1 月 27 日、2 月 3 日にいずれも京都大学で開催した）。

そして、ケルン大学、ドイツ霊長類センター、エジンバラ大学、国立科学研究センター、アジス・アベバ大学、ヤウンデ第 1 大学、ケープタウン大学、アンタナナリヴ大学、マギル大学（このうちマギル大学は、本事業の進展に伴って平成 28 年度から連携機関に追加した）の 9 機関に、5 名の若手研究者を派遣した。具体的には、アンタナナリヴ大学およびドイツ霊長類センターへ長年マダガスカルで調査を行ってきた市野進一郎博士を派遣し、アフリカ地域における新たな研究課題である「アフリカ生物保全学」を推進中である。またボツワナにおける中国商人の調査を進めてきた訾彦閻博士はケープタウン大学とケルン大学へ派遣され、南部アフリカにおけるアジア人コミュニティの形成に関する研究を行った。訾彦閻博士はこの成果に基づいて、2017 年にカメルーンに拠点を置く Langaa RPCIG という出版社から英文単著を出版する予定である。またエチオピアにおける女性教育の推進に伴う諸問題について研究してきた有井晴香博士をアジス・アベバ大学へ派遣した。有井博士は、現地で地域社会の変容に関する調査・研究を行っている。さらに南部アフリカにおける先住民運動について研究してきた丸山淳子博士をケルン大学、ケープタウン大学、マギル大学に派遣した。丸山博士は、アフリカにおけるグローバル化に関する共同研究を推進している。さらに狩猟採集民として知られているバカのもとで長期フィールドワークを行ってきた園田浩司博士をヤウンデ第 1 大学およびエジンバラ大学に派遣した。園田博士は、バカをはじめとするアフリカの子どもの言語的社会化研究に関する調査・研究を行っている。

有井晴香博士、丸山淳子博士、園田浩司博士は平成 28 年度からの派遣となるので、渡航前に渡航予備計画を作成・提出させた。さらに、その内容に基づいて、担当研究者と若手研究者による事前相談会を開催し、渡航目的が本事業の趣旨にかなうように確認・調整を行った。若手研究者のうち訐彦閻博士と丸山淳子博士は、平成 28 年度中に当初予定していた連携機関への派遣を成功裏に終えた。市野進一郎博士、有井晴香博士、園田浩司博士は平成 29 年度も引き続き連携機関に派遣し、本務校・連携機関の研究者との国際共著論文（若手研究者がポスドクの場合は、本務校での常勤研究者を含む研究チームを構成する）の執筆を目的としたワークショップ等を行って、アフリカセンターおよび ASAFAS と連携機関との間の組織的な共同研究を推進する。

また本事業の主要な成果の 1 つとなる論文集を学術季刊誌 African Study Monographs の Supplementary Issue として発行するための準備を進めている。この特集号は 2 つのパートからなり、第一のパートでは本事業の主要連携研究者・連携研究者が中心となってそれぞれの連携機関におけるアフリカ研究パラダイムを再考する論文を寄稿する。第 2 のパート

では、本事業で連携機関に派遣された若手研究者が中心となって、派遣先での共同研究の成果に基づく最前線のアフリカ地域研究の事例を論文にまとめる。特集号は本事業の最終年度となる 2017 年度中の公刊を目指しており、各々の著者はすでにその論文を執筆中である。

また本事業で重点を置く GIS 関連資料解析・動画資料データベース構築のために、PC 一式、アクションカメラ、自動撮影カメラ等のハードウェア、および動画資料解析装置（ソフトウェア）・図書等一式（国内外のアフリカ研究のトレンドの動向を知るための書籍に重点を置いた）等を購入した。さらに昨年度公開した本事業独自のホームページ（和文、英文）のさらなる充実に向けた作業を進めている<<http://brain.africa.kyoto-u.ac.jp/>>。このホームページでは、プロジェクトの概要、事業実施体制、連携機関の概要、派遣報告書、プロジェクトの成果、若手研究者への申請手続きなどについての情報を掲載しており、プロジェクトの進展に応じて随時更新していく予定である。

3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

本事業の目標は、地域研究のための研究環境が卓越しており、従来から京都大学のアフリカセンターと ASAFAS アフリカ地域研究専攻（以下、アフリカ専攻）が学术交流を行ってきた海外の連携機関との双方向的な学术交流をさらに推進し、グローバル化が著しい現代世界において「アフリカ地域」を理解していくための研究パラダイムを再編することである。「2. 本年度の実績概要」で記した平成 28 年度の活動はこの目標に沿って計画したもので、これらにより連携機関との協業関係をいっそう強化することができた。事業 2 年目としての目標はおおむね達成できたと考えている。ただし、平成 28 年度は 3 名の主要連携研究者・連携研究者の招聘計画の調整に予想以上に手間取り、当初の予定よりも招聘日数がかかなり少なくなってしまうことは反省材料である。その際には email や IP 電話等の連絡手段を用いて、全体としての研究計画へできるだけ影響が生じないように尽力した。平成 29 年度は招聘計画をいっそう早くから調整する予定である。

また当初はアンタナナリヴ大学とヤウンデ第 1 大学にそれぞれ 1 名の担当研究者を派遣し、若手研究者を受け入れる体制の最終チェックと細部に関わる折衝・調整を行う予定であった。しかし共同研究の進展に伴って、アンタナナリヴ大学へ担当研究者をもう 1 名派遣するとともに、アジス・アベバ大学とケープタウン大学にも各 1 名担当研究者を派遣することとした。これらは本事業による共同研究が当初の予想以上に進んだことを反映しており、事業の進展上肯定的にとらえている。

今年度はいずれの若手研究者も派遣先での研究活動に邁進していたので、目立った業績がでてくるのはこれからだと考えられる。その中でも、上述の通り、菅彦岡博士が派遣先での研究の成果に基づいて 2017 年に海外の出版社から英文単著を出版する予定となっていることは特筆に値する。また、連携研究者や若手研究者らが中心となって African Study Monographs の Supplementary Issue を出版する準備も進めている。さらに、本事業の内容や成果を京都大学において議論するため、昨年度に続けて今年度は 3 回「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」を開催した。いずれも盛況で、連携研究者と担当研究者を中心とする参加者の間で非常に活発な議論が行われた。

また今年度も、本事業で重点を置く GIS 関連資料解析・動画資料データベースの構築に向けてハードウェアとソフトウェアの整備を行った。これらによってアフリカセンターと ASAFAS アフリカ専攻は、アフリカ地域研究に関して、日本はもちろん世界有数の研究資料を有し、地域を包括的にとらえていくことが可能な教育研究機関となりつつある。さらに平成 27 年度に公開した本事業独自のホームページ（和文、英文）には、本事業の研究成果や派遣報告書を和文および英文で順次掲載している。これはとくに、連携機関との間で本事業の内容や成果に関する相互理解を高めることに貢献している。今後もよりいっそう充実したホームページとしていく予定である。

4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・著者名について、責任著者に「※」印を付して下さい。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。 ・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>として下さい。 	
1	池野旬（印刷中）「現代タンザニア土地政策の構図」、『冷戦後アフリカの土地政策』（武内進一編）千葉：アジア経済研究所（査読有）
2	Shigeta, M.* & Kaneko, M. (2017) Chapter 11 ZAIRAICHI (Local Knowledge) as the Manners of Co-existence: Encounters between the Aari Farmers in Southwestern Ethiopia and the ‘Other’ In G. Yntiso et al. (eds.), <i>African Potentials: Conflict handling and peaceful coexistence</i> , Bamenda: Langaa Research and Publishing, pp.311-338. (査読無)
3	Takada, A. (2016) Education and learning during social situations among the Central Kalahari San. In H. Terashima & B. S. Hewlett (eds.), <i>Social learning and innovation in contemporary hunter-gatherers: Evolutionary and ethnographic perspectives</i> . Tokyo: Springer, pp.97-111. DOI: 10.1007/978-4-431-55997-9(査読有)
4	Takada, A. (2016) Unfolding cultural meanings: Wayfinding practices among the San of the Central Kalahari. In W. Lovis & R. Whallon (eds.), <i>Marking the Land: Hunter-gatherer creation of meaning in their environment</i> . New York: Routledge, pp.180-200. (査読有)
○ 5	Hockings, KJ.*, Yamakoshi, G. & Matsuzawa, T. (2016) Dispersal of a Human-Cultivated Crop by Wild Chimpanzees (<i>Pan troglodytes verus</i>) in a Forest? <i>Farm Matrix. International Journal of Primatology</i> . DOI:10.1007/s10764-016-9924-y (オンラインファースト、ページ数未定) (査読有)
6	木村大治 (2016)「恥ずかしさの起源と進化」『現代思想 2016年5月号 特集 人類の起源と進化 -プレ・ヒューマンへの想像力』東京：青土社 pp.198-211. (査読無)
7	木村大治 (印刷中)「『道具性』と『手性』」『手の事典』東京：朝倉書店 (査読無)
8	木村大治 (印刷中)「海外における宇宙人類学の動向」『民博通信』大阪：国立民族学博物館 (査読無)
9	木村大治 (印刷中)「『女も男もフィールドへ』(FENICS 100万人のフィールドワーカージーズ 12) 椎野若菜, 的場澄人(編)書評」『アジア・アフリカ地域研究』(査読無)
10	木村大治 (印刷中)「『山歌の民族誌 -歌で詞藻(ことば)を交わす』梶丸岳(著)書評」『文化人類学』(査読無)
11	Kaneko, M. (2016) Absence de restes dans une societe non occidentale, Les Ari du Sud-Ouest de L’Ethiopie, In <i>F. Jouliau, Y. Tastevin et J. Furniss(eds.), Techniques & Culture</i> Numero 65-66: 134-137. (査読有)
12	Kaneko, M. (2016) Variations in Shape, Local Classification, and the Establishment of a Chaîne Opératoire for Pot Making among Female Potters in Southwestern Ethiopia, In H. Terashima & B. Hewlett (eds.), <i>SOCIAL LEARNING AND INNOVATION IN CONTEMPORARY HUNTER-GATHERERS: EVOLUTIONARY AND ETHNOGRAPHIC PERSPECTIVES</i> . Tokyo: Springer, pp. 217-227. (査読無)
13	丸山淳子(2016)「誰と分かちあうのか:サンの食物分配にみられる変化と連続性」,『贈与論再考』(岸上伸啓編)京都：臨川書店, pp. 184-208. (査読有)

14	Zi, Y. (in press). Iron Sharpens Iron: Social Interactions at China Shops in Botswana. Bamenda: Langaa Research and Publishing. (査読有)
----	---

②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <p>・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。</p> <p>・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。</p>	
1	Takada, A. (2017) Participation in rhythm: !Xun socialization through singing and dancing activities. Paper presented at Séminaire special du CLLE-LTC, Université Toulouse - Jean Jaurès, Toulouse, France, 15th March 2017. (招待講演)(口頭発表)
2	Takada, A. (2017) Panelist of conversation hour, "Fieldwork and Family", at the 46th Annual Meeting of the Society for Cross-Cultural Research (SCCR), Hampton Inn Convention Center, New Orleans, LA, USA, March 1-4th (March 3rd). (パネルディスカッション)
3	Takada, A. (2017). Practices of early cultural learning: Responsibility formation in caregiver-infant interaction among the G ui/G ana of Botswana. Paper presented at Laboratoire Ethologie, Cognition, Développement, Université Paris Ouest Nanterre La Défense, Paris, France, 24th February 2017. (招待講演)(口頭発表)
4	Takada, A. (2017). The cultural and ecological foundations of ethnicity among the !Xun of North-central Namibia. Paper presented at Dans le cadre des séminaires conjoints de Rémy Bazenguissa-Ganga "Guerres électorales ou violences électorales?" et de la Fondation du Japon, CRAA-ETRE, EHESS, Paris, France, 21st February 2017. (招待講演)(口頭発表)
5	Takada, A. (2017). Participation in rhythm: Peer group interactions among the !Xun San of Namibia. Paper presented at Paper presented at Tema Barn Higher seminar spring 2017. Linköping University, Sweden, 14th February 2017. (招待講演)(口頭発表)
6	高田 明 (2017) イントロダクション. 第6回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー. 於: 京都大学, 京都. 2017年2月3日. (審査無)(口頭発表)
7	高田 明 (2017) イントロダクション. 第5回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー. 於: 京都大学, 京都. 2017年1月27日. (審査無)(口頭発表)
8	高田 明 (2016) ナミビア北中部, クンとオバンボのコンタクトゾーンにおける景観の変遷. 第2回景観形成の自然誌コロキウム. 於: 京都大学, 京都. 2016年12月17日. (審査無)(口頭発表)
9	Takada, A. (2016) Deconstructing in- and out-group biases: An ethnographic approach. A paper presented at the symposium "Lights and shadows of in and outgroup bias: From development and evolutionary views" at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 24-29th July 2016 (29th July) Program, p.168. (審査有)(口頭発表)
10	高田 明 (2016) 子育ての相互行為分析: 言語的社会化論によるアプローチ. 分科会: 異分野から見た文化人類学: コラボレーションの可能性と問題点. 日本文化人類学会第50回研究大会発表要旨, p.84. 於: 南山大学名古屋キャンパス, 愛知. 2016年5月28-29日(5月29日). (審査有)(口頭発表)
11	高田 明 (2016) ディスカッション. 分科会: やりどりの言語人類学. 日本文化人類学会第50回研究大会. 於: 南山大学名古屋キャンパス, 愛知. 2016年5月28-29日(5月28日). (審査有)(口頭発表)

12	<u>Takada, A.</u> (2016) Towards the gesture analysis of early ethnographic films. A paper presented at the workshop "Infant-Caregiver Interaction", held at Human Ethology Film Archive, Senckenberg, Frankfurt am Main, Germany, 9-10th April 2016 (9th April). (招待講演)(口頭発表)
13	<u>Takada, A.</u> (2016) Is There Cultural Evidence for Different Conceptions of Attachment? Group discussion at Ernst Struengmann Forum "Contextualizing Attachment: The Cultural Nature of Attachment", Frankfurt am Main, Germany, 3-8th April 2016. (招待講演)(口頭発表)
14	<u>山越 言*</u> , 森村成樹, 松沢哲郎(2016)「ギニア・ボソウの野生チンパンジー群の保全状況と将来像:持続可能性をどう定義するか」第32回日本霊長類学会大会, 鹿児島大学, 鹿児島. 2016年7月15-17日.(審査有)(口頭発表)
15	<u>木村大治</u> (2016)「グラスカッター飼育と動物性タンパク質の摂取」公開セミナー「ガーナを知ろう! 2, 於: 京都大学 野生動物研究センター, 京都, 2017年1月28日. (審査無)(口頭発表)
16	<u>Kimura, D.</u> (2016) "Congo War, Long-Distance Walking Trade and Bushmeat Hunting" Institutskolloquium, Institut für Ethnologie und Kulturwissenschaft, Universität Bremen, Germany, 13th December 2016. (審査無)(口頭発表)
17	<u>Kimura, D.</u> (2016) "Features of Subsistence Activities in the Upper West Region and Grasscutter Rearing" Ghana grasscutter project workshop, In service training center, Wa, Upper West Region, Ghana, 15th November 2016. (審査無)(口頭発表)
18	<u>Sato, H.</u> (2016) Lemurs' contribution to seed removal of a large-seeded plant (<i>Astrotrichilia asterotricha</i> , Meliaceae) in Madagascar, The 26th Congress of the International Primatological Society, Navy Pier, Chicago, USA, 26th August 2016. (審査有)(口頭発表)
19	<u>Kaneko, M.</u> (2016) Pottery Making Style and Chaîne opératoire in Southwestern Ethiopia with Special Reference to Finger Movement Patterns (T09Dsession: Debating Ethnoarchaeology), the Eighth World Archaeological Congress Kyoto, Doshisha University, Kyoto, Japan, 28th August -2nd September 2016. (審査有)(口頭発表)
20	<u>Kaneko, M.</u> (2016) What They Learned and How They Know: Formation of local knowledge (ZAIRAICHI) on livelihoods among the young farmers in Ethiopia, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Inter-Congress, The Hotel Dubrovnik Palace, Dubrovnik, Croatia, 4th-9th May 2016 (査読有)(口頭発表)
21	<u>Maruyama, J.</u> (2017) "Bushman Tourism" in Botswana, Workshop on participatory tourism in Africa, !khuwa ttu, Western Cape, South Africa, 7th March 2017. (招待講演)(口頭発表)
22	<u>Maruyama, J.</u> (2016) Resettlement, Conservation and Tourism: Contemporary Dynamics of Residential Moves among the San in Central Kalahari Seminar Series of the Centre for Society, Technology, and Development (STandD), McGill University, Canada, 2nd December 2016. (招待講演)(口頭発表)
23	<u>Maruyama, J.</u> (2016) Coming to Political Consciousness: The Indigenous Land Rights Movement among the San of Southern Africa Africanist Seminar Series of University of Toronto, University of Toronto, Canada, 18th November 2016. (招待講演)(口頭発表)
24	<u>Maruyama, J.</u> (2016) Land Issues and Global Indigenous Rights Movement among the San hunter-gathers in Southern Africa: Comparison of two cases from Botswana and South Africa, Department Speakers Series of the Department of Anthropology, McGill University, Canada, 31st October 2016. (招待講演)(口頭発表)
25	<u>Maruyama, J.</u> (2016) Possibilities and Dilemmas of Indigenous Land Rights Movement of the San Hunter-gatherers: Comparison of two cases from Botswana and South Africa, IUAES Inter-Congress, Dubrovnik, Croatia, 6th May 2016. (審査有)(口頭発表)

26	Maruyama, J. (2016) Dynamics of Social Relationships and Residential Practices among the San Hunter-Gatherers in Central Kalahari, Global South Studies Cologne Public Lectures 2016, Cologne, Germany, 27th April 2016. (招待講演)(口頭発表)
27	Ichino, S.*, Soma, T., Miyamoto, N., Sato, H., Koyama, N. & Takahata Y. (2016) Male Dispersal Pattern in Ring-Tailed Lemurs (<i>Lemur catta</i>). The 5th International Seminar on Biodiversity and Evolution: Molecular Studies for Wildlife Science, Kyoto University North Campus Science Seminar House, Kyoto, 7th June 2016. (審査有)(ポスター発表)
28	Zi, Y. (2016) African-Asian Encounters (III) Afrasian Transformations: Beyond Grand Narratives, "Chinese Investment in Africa: Ground Level Interaction Matters", Goethe University Frankfurt, Germany, 28-30th September 2016 (28th September). (審査有)(口頭発表)
29	Zi, Y. (2016) The 2016 Chinese in Africa/Africans in China Conference, "China shop as an unauthorized nation brand in Botswana", Aga Khan University, Kenya, 18-20th August 2016 (20th August). (審査有)(口頭発表)
30	Zi, Y. (2016) 9th International Conference of the International Society for the Study of Chinese Overseas, "Unveiling the Mask of Batswana Customers: We Don't Like China Shops But We Still Need Hong Kong Goods", University of British Columbia, Canada, 6-8th July 2016 (6th July). (審査有)(口頭発表)
31	有井晴香(2016)「エチオピア西南部マーレの女性のライフストーリー—近代学校教育の受容と解釈」日本アフリカ学会第53回学術大会, 於: 日本大学生物資源科学部, 東京, 2016年6月4日. (審査無)(口頭発表)

5. 若手研究者の派遣実績(計画)

【海外派遣実績(計画)】

年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	合計
派遣人数	2人	5人 (2人)	2人 (2人)	5人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の海外派遣実績】

派遣者①の氏名・職名：市野進一郎・ポスドク

<p>(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)</p> <p>市野進一郎博士は、アフリカ地域研究パラダイムの再編に寄与する新たな研究課題として注目されている「アフリカ生物保全学」を推進するため、メガ多様性国であるマダガスカルで先進的な研究を進めているドイツ霊長類センターとその連携機関であるアンタナナリヴ大学、日本側の担当研究者である山越言准教授、佐藤宏樹助教らと協力して共同研究を推進する。</p> <p>(具体的な成果)</p> <p>平成28年度はまずドイツ霊長類センターに市野進一郎博士を派遣した。市野博士は、Peter Kappeler教授らとマダガスカルにおける生物多様性保全についての共同研究を行った。続いて市野博士はアンタナナリヴ大学およびベレンティ保護区を訪問し、Hajanirina Rakotomanana教授らと保護区管理についての共同研究を行った。これらを通じて市野博士は、ドイツ、マダガスカル、日本が連携してマダガスカルにおける長期研究と保護区管理を両立させることを目指したネットワークを形成しつつある。</p>	
派遣先	派遣期間

(国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
マダガスカル, アンタナナリヴ大学, 理学部動物学科, Hajanirina Fanomezantsoa Rakotomanana 教授	40 日	165 日	82 日	287 日
ドイツ, ドイツ霊長類センター, 行動生態学・社会生物学部門, Peter Kappeler 教授	13 日	32 日	0 日	45 日

派遣者②の氏名・職名：訾彦閻・ポスドク

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

訐彦閻博士は、平成 27-28 年度にかけて南アフリカのケープタウン大学とドイツのケルン大学に客員研究員として滞在し、アフリカにおけるグローバル化に関する共同研究の一環として、主担当研究者である池野旬教授、担当研究者である高田明准教授らと共同で、南部アフリカにおけるアジア人コミュニティの形成に関する共時的・通時的な分析を行う。

(具体的な成果)

平成 28 年度、訐彦閻博士はまずケープタウン大学に滞在し、**Matthias Brenzinger** 所長や **Francis B. Nyamnjoh** 教授らと南部アフリカにおけるアジア人コミュニティの形成およびアフリカにおけるグローバル化に関する共同研究を行った。また年度後半は主にケルン大学に滞在し、**Thomas Widlok** 教授、**Michaela Pelican** 教授らとアフリカにおけるアジア人コミュニティに関する議論を行った。さらにこの間、**Langaa RPCIG** という出版社から 2017 年に出版される予定の英文単著の執筆を進めた。加えてこの合間に、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開催される **ISSCO** 学会、ケニアのアガ・カーン大学で開催される **Chinese in Africa/African in China Conferense** 学会、ドイツのゲーテ大学で開催される **African-Asian Encounters** 学会にも参加した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
南アフリカ, ケープタウン大学, アフリカ言語多様性研究センター, Matthias Brenzinger 所長	4 日	138 日	0 日	142 日
カナダ, ブリティッシュ・コロンビア大学 (学会参加、資料収集)	0 日	9 日	0 日	9 日
ケニア, アガ・カーン大学 (学会参加、資料収集)	0 日	7 日	0 日	7 日
ドイツ, ケルン大学, ケルン・グローバルサウス研究センター, Thomas Widlok 教授	0 日	165 日	0 日	165 日
ドイツ, ゲーテ大学 (学会参加)	0 日	3 日	0 日	3 日

派遣者③の氏名・職名：有井晴香・ポスドク

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

有井晴香博士は、平成 28-29 年度にかけて、人と自然の交渉史に関する共同研究の一環として、エチオピアのアジス・アベバ大学および、フランスの国立科学研究センターにおいて、担当研究者である金子守恵准教授らと共同で、在来知を用いた地域開発についての研究を行う。

(具体的な成果)

平成 28 年度は、有井晴香博士をエチオピアのアジス・アベバ大学に派遣し、エチオピアの研究者との共同研究体制のもと、エチオピア農村女性の民族誌に関する資料収集およ

び南部エチオピア農村における女性のライフヒストリーに関する現地調査を行っている。また京都大学の金子准教授や国立科学研究センターの Frédéric Joulian 准教授らと連絡を取り合って、平成 29 年度にフランスの国立科学研究センターへの派遣を行うための準備を進めている。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
エチオピア, アジス・アベバ大学, 社会科学部, Gebre Yntiso Deko 学部長	0 日	71 日	6 日	77 日
フランス, 国立科学研究センター, 社会科学高等研究院, Frédéric Joulian 准教授	0 日	0 日	240 日	240 日

派遣者④の氏名・職名：丸山淳子・特任准教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

南部アフリカの先住民を主な対象として長期フィールドワークを行ってきた丸山淳子博士を平成 28 年度にドイツのケルン大学, 南アフリカのケープタウン大学, およびカナダのマギル大学に派遣する。丸山博士は, 担当研究者である高田明准教授らと共同で, アフリカにおけるグローバル化に関する共同研究を行う。

(具体的な成果)

平成 28 年度, 丸山博士は, ケルン大学ではアフリカにおけるグローバル化に関する共同研究の一環として, 南部アフリカにおける民族意識の変遷に関する共時的・通時的な分析を行った。またケープタウン大学では, 南アフリカの研究者との共同研究体制のもと, 現地でアフリカにおける多文化共生の道を模索するための調査を行った。マギル大学では, 先住民の権利に関する住民運動と研究者の連帯についての研究を行った。これらに加えて, クロアチアで開催された IUAES 学会, 米国ニューヨークで開催された The Indigenous Peoples Movement for Self-Determination and Liberation および 15th Session of the Parmanent Forum on Indigenous Issues の集会, 南アフリカ・シーダーバーグで開催される KBA phonological typology meeting and Riezlern symposium 6 へも参加した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ドイツ, ケルン大学, ケルン・グローバルサウス研究センター, Michael Bollig 教授	0 日	55 日	0 日	55 日
南アフリカ, ケープタウン大学, アフリカ言語多様性研究センター, Matthias Brenzinger 所長	0 日	44 日	0 日	44 日
カナダ, マギル大学, 人類学科, John G. Galaty 准教授	0 日	78 日	0 日	78 日
カナダ, トロント大学 (資料収集)	0 日	6 日	0 日	6 日

南アフリカ、プレトリア大学（資料収集）	0日	13日	0日	13日
南アフリカ、シーダーバーグ・トラベラーズ・レスト、KBA音韻類型学学会（学会参加）	0日	4日	0日	4日
クロアチア、ドゥブロブニク、IUAES学会（学会参加）	0日	9日	0日	9日
米国、ユナイテッドネーションプラザ（情報収集）	0日	3日	0日	3日
米国、国連本部（フォーラム参加）	0日	6日	0日	6日
イギリス、イギリス国公文書館（資料収集）	0日	5日	0日	5日
スワジランド、スワジランド大学（資料収集、現地調査、研究打合せ）	0日	36日	0日	36日
ボツワナ、ボツワナ大学（資料収集、現地調査）	0日	33日	0日	33日
ボツワナ、ハボロネ、ハンツイ周辺（現地調査）	0日	15日	0日	15日
ナミビア、ウィンドフック・チェンクエ周辺（現地調査）	0日	8日	0日	8日

派遣者⑤の氏名・職名：園田浩司・ポスドク

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>西アフリカでの長期フィールドワークを行ってきた園田浩司博士を平成28-29年度にかけてカメルーンのヤウンデ第1大学およびスコットランドのエジンバラ大学に派遣する。園田博士は、日本側の担当研究者である木村大治教授らと協力して、アフリカの子どもの言語的社会的実態を明らかにする研究を行う。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成28年度、園田博士は、ヤウンデ第一大学のボンジ・エジェンゲレ博士らと協力しながら、カメルーンに住み、狩猟採集民として知られているバカの子どもの言語的社会的実態に関する調査を行った。また園田博士はその後、エジンバラ大学に派遣され、とくに西アフリカにおける子どもの社会化過程に注目しながら、動態的な社会関係知識の伝承や再生産の実態を明らかにする研究を行っている。エジンバラ大学には平成29年度も引き続き滞在し、受入研究者らの協力を得ながら、上記の研究活動を進める予定である。</p>				
派遣先 （国・地域名、機関名、部局名、受入研究者）	派遣期間			合計
	平成27年度	平成28年度	平成29年度	
カメルーン、ヤウンデ第1大学、文化人類学科、Mbonji Edjenguélé 学科長	0日	177日	0日	177日

スコットランド、エジンバラ大学、 アフリカ研究センター、Barbara Bompani 所長	0 日	49 日	103 日	152 日
イギリス、ロンドン大学（資料収集）	0 日	2 日	0 日	2 日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

6. 研究者の招へい実績（計画）

【招へい実績（計画）】

年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
招へい人数	6 人	3 人 (1 人)	4 人 (0 人)	12 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者①の氏名・職名：Clemens Greiner・上級講師

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>本プロジェクトにおいて Greiner 上級講師は、アフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進する役割を担う。とくに、ドイツにおけるアフリカ諸地域を対象とした景観研究と民族学研究の関係に着目し、上記の課題についての議論を行う。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成 28 年度末-29 年度始めにかけて、Greiner 上級講師を 2 週間程度招聘し、ケルン大学と京都大学の間でアフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進していくための議論を行った。また上級講師自身が進めてきたナミビアにおける環境利用および社会経済的な人の移動と階層化に関して、やはり同地域で調査を進めている日本側の受入研究者らと議論を行った。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ケルン大学・ケルン・グローバルサ ウス研究センター、ドイツ；日本側 受入研究者：高田明（京都大学）	12 日	3 日	0 日	15 日

招へい者⑤の氏名・職名：Frédéric Joulian・准教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>フランスの国立科学研究センター・社会科学高等研究院の連携研究者である Frédéric Joulian 准教授は、日本側の受入研究者である山越准教授らとアフリカ地域におけるローカルな知の活用についての共同研究を行う。とくに技術や文化の進歩、民族考古学的な研究について、アフリカの諸地域における具体的な資料に基づいた議論を行う予定である。</p> <p>（具体的な成果）</p>

平成 28 年度は Jouliau 准教授を京都大学に 3 ヶ月間程度招へいして受入研究者らと予定していた議論を行った。こうした人類社会の進歩を論じる民族考古学的な研究は、「人類のゆりかご」と呼ばれるアフリカにおいては地域研究の重要な一角をなす。そこで Jouliau 准教授が京都大学に滞在している間（平成 29 年 1 月 13 日）に、「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」の枠組みを用いて、日本（日本に滞在中の外国人研究者を含む）の人類学者、霊長類学者、考古学者らと合同で、人間性の根源を探るためのシンポジウム“Technologies and Nature: Asia-Europe in Africa crossed perspectives”を開催した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
国立科学研究センター，社会科学高等研究院，フランス；日本側受入研究者：山越言（京都大学）	0 日	71 日	0 日	71 日

招へい者⑫の氏名・職名：Barbara Bompani・教授

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

エジンバラ大学の主要連携研究者である Barbara Bompani 教授とは、アフリカにおける地域のデザインに関する国際共同研究を推進する。とくに、地域開発に関する社会科学的アプローチについて、Bompani 教授や受入研究者がフィールドワークによって収集したデータに基づいて具体的な分析と議論を行う。

（具体的な成果）

平成 28 年度は Bompani 教授を京都大学に 10 日間程度招へいし、上記の国際共同研究を推進するための議論を行った。また Bompani 教授が京都大学に滞在している間（平成 29 年 1 月 27 日）に、「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」の枠組みを用いて、我が国のアフリカ研究者と合同でアフリカにおける地域のデザインについてのセミナーを開催した。Bompani 教授はこのセミナーで“The State of African Studies in Europe”および“Forging New Alliances: Reflections on Religion and Politics in Post-Apartheid South Africa”という講演を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
エジンバラ大学・アフリカ研究センター，スコットランド；日本側受入研究者：池野旬（京都大学）	0 日	9 日	0 日	9 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

該当なし

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。